

〔庭園〕 心の安らぎと哲学 土・水・石＋借景

仏教庭園を取り上げてみよう。宗派にかかわらず、山川草木の自然の姿を崇め、確固不動のものとして石を、また変転自在なものとして水を取り入れる。視線を一か所に固定するのが基本だが、後に境内の庭に回遊式を採用。

大原 三千院



嵯峨野 大覚寺



土と苔がベースで広場を構成する。人はこの中に踏み入ることはせず、じっと目を凝らすのが作法。見つめていると苔の先端のみずみずしさに、苔も自分も生きているのだとの実感と愛着が湧く。時には小さな丸石の置物などが空間の和みとして設けることもある（三千院）。苔の延長上に低木の刈込が続き、枝を取り払った幹だけの高木が庭に奥行きを出す。三千院は門跡と称し皇室の一族が門主。大覚寺は嵯峨天皇の離宮であったものを寺になおした。その名残で周辺を嵯峨野と称する。

醍醐寺 弁天堂



四天王寺 浄土庭園



池・小川・橋が構成要素で、歩きながら思考をめぐらす目的で作庭してある。境内全域が一つの庭で、移動することに目に映る情景が変化する。醍醐寺は秀吉が豪華な花見をしたことで知られ、背後には奥醍醐と呼ばれる急峻な山を背負う。四天王寺は聖徳太子ゆかりの名刹で、ご利益もあり、阿倍野ハルカスがすぐそば。

化野念仏寺 石仏群



神護寺



嵯峨野の奥に化野念仏寺がある。愛宕山に至る街道の麓で（少し先に愛宕念仏寺がある）、創建は空海、その後法然が念仏道場をこの地に開いた。元々葬送の地で、石仏が散乱していたものを、明治36年ごろ現在の形に整備した。神護寺も空海の創設で、愛宕五山の一つ高尾山寺を改称。真言宗の古寺である。厄除けに谷に投げるかわらけはここが起源。

仁和寺 御殿



清澄庭園



池をめぐる庭園だが、仁和寺は広大な境内の山を背景に、わざとコンパクトに見えるように工夫。一方清澄庭園は江戸時代下総閑宿の久世家の下屋敷だったが、明治入って荒れ果てた庭を岩崎弥太郎が買い取り、没後も整備を尽くして代表的な「回遊式林泉庭園」が完成する。関東大震災でこの池が人命救助に役立ったと、東京都に寄贈された。